人文科学研究会（許光俊先生）卒業制作

処女喪失から見る『愛人』

法学部法律学科４年
直井 彩

初めに

少女は、どこまでも続くような、雄大で、濁った、メコン河を横断する。

少女は、血を流し、悦楽の海に投げ込まれる。

少女は、海へ飛び出し、見知らぬ土地へと渡る。

マルグリット・デュラス（1914～1996 年）の『愛人』（1984 年刊行、日本では 1985 年刊行）は、「わたし」、「彼女」、「娘」など、頻繁に変化する不安定で年老いた語り手が、自身の経験をたどり、新たに創り出すことを試みる物語である。『愛人』のテクストは、読み手の脳に映像を喚起する力を持つ。少女時代を忠実に再現する気は毛頭なく、現在の語り手が、自由気ままに語る一つの物語であり、我々の想像力を必要とする、いや、読み手の想像を引き起こす言葉によるイメージで構成されている。

かつて『愛人』は、フランスにおいて、純文学としては、他に類を見ないほどの人気を誇ったと見える。この物語に対して、デュラスという人物に焦点を当てる方法、いびつで異質な家族の物語として解く方法、フランス植民地主義を軸にする方法など、様々な手を駆使して、多くの人が解釈に挑んだ。デュラスがどのような意図を持ってこのテクストを認めたのか、読み手には、完全には明かされない。

しかし、彼女の人生において、中国人の愛人との間で起こった「処女喪失」は一つのテーマとなっているはずだ。彼女は、いくつかの作品の中で、処女喪失を繰り返し語る。他の作家の例を見ても、処女喪失が描かれる作品は多くはない。女性作家の場合は、なおさらだ。

「処女」という概念は、所詮、男性側にのみ必要とされるにすぎないのだろうか。ポルノグラフィの題材として、男性の遊び道具にされるだけのものなのだろうか。そうではない。処女喪失は、極めて重大な女性の側の経験として存在するはずだ。その行為や出来事が何を意味するか、その行為によって何を得るか、失うか、明快で一義的な答えは定まるはずもないが、処女喪失とは事件であり、女性に何らかの作用を及ぼさないわけがないのだ。

本稿では、『愛人』のテクストを、「処女喪失」という観点から考察したい。

物語の少女

『愛人』はデュラスの自伝ではない。

十五歳の少女による、中国人の愛人との性愛の関係が、デュラスの実体験に基づくとされ、人々はセンセーショナルな自伝的小説として、これを受け取った。世間一般での『愛人』の話題性は、自伝という要素が加わったことでいっそう高まった。しかし、『愛人』がデュラスの自伝であるとしたら、不可解な一節がある。

わたしの人生の物語などというものは存在しない。そんなものは存在しない。物語をつくりあげるための中心などけっしてないのだ。(p.14)[1]

デュラスは、自身の経験を源泉として生成された、想像世界を生きている。『愛人』のテクストは、彼女の想像世界の産物であり、人生の再現を否定することで、フィクションを示唆しており、自伝としての読みを肯定しない。

さらに、デュラスは、『愛人』について、「それは書かれているから、すべて本当だ」[2]と語る。『愛人』は、実際の出来事であるから真実になるのではない。ただ、過去の記憶をもとにして、生き直す結果、新たに生まれた世界が、『愛人』の語り手、そして読み手にとって真実になるのだ。『愛人』にデュラスの人生は存在しない。これは、自伝ではない。そこにあるのは、語り手の作り出す世界。語り手の頭の中にあるものの全体ではなく、あくまでそのエッセンスを部分的にのみ享受する世界なのである。断章形式のテクストは、読み手の想像力を喚起する。テクストを単になぞるだけでは、不可解な物語。読み手は想像力をふくらませ、テクストを味わい、語り手の意図した、映像を作り出す作用に、陥落する。

『愛人』は一つの物語である。

少女は、目覚める。書くということ、エクリチュールが自分の運命であることに。『愛人』は当初、物語としての形ではなく、『絶対的映像』[3]という写真集として企画されていた。

わたしはよくあの映像のことを考える、いまでもわたしの眼にだけは見えるあの映像、その話をしたことはこれまで一度もない。いつもそれは同じ沈黙に包まれたまま、こちらをはっとさせる。自分のいろいろな像のなかでも気に入っている像だ、これがわたしだとわかる像、自分でうっとりしてしまう像。(p.7-p.8)

『愛人』の冒頭において、この映像が言及されている。これまで誰にも話したことのない「あの映像」が読み手にはまだわからない。

---

[1] 本稿における『愛人』の引用は、マルグリット・デュラス『愛人(ラマン)』(清水徹訳、河出文庫、1992年)からとし、本文中(　)にそのページ数を記載する。

[2] ヤン・アンドレア「書くことは生きること」『ユリイカ7月号第31巻』(青土社、1999年)p.80

[3] 原題は、”L' Image absolute”であり、様々な邦訳が当てられるが、内田洋「マルグリット・デュラス『愛人』覚書—彼女は海に身を投げなかった—」(金沢大学文学部論集、1991年)を参考に、以下、「絶対的映像」の語を用いる。

言いそえれば、わたしは十五歳半だ。
メコン河を一隻の渡し船がとおってゆく。
その映像は、河を横断してゆくあいだじゅう、持続する。(p.9)

その映像において、登場するのは十五歳半の少女である。ここでは、これから繰り返し表現される「メコン河の横断」が初めて語られる。メコン河の表象は、二つの意味を持つ。一つは、少女の処女喪失、もう一つは、少女のやりたいこと、やらなくてはならないことである、書くという行為、幅が広く、茶色く濁ったメコン河が、確かに動いているように、流れるように書くという行為、流れゆくエクリチュールである。

まさにこの旅の途中で、あの映像ははなれて浮かびあがったのであろう、あの映像が全体から取り出されたのであろう。その像は現実に存在することができたかもしれない、写真を一枚撮るということがありえたかもしれない、ほかの場所、ほかの場合の写真はあるのだから。しかし、それは写真には撮られなかった。あまりにささやかで、写真を撮ろうという気持をそそらぬ対象だった。だれがそんなことを考えることができたろう。写真を撮るということがありえたとしたら、だれかが、わたしの人生におけるあの事件の重大さを、あの河の横断の重大さをその場で判断できた場合にかぎる。ところが、渡し船が河を横切ってゆくときには、そんな像が存在するということまでは、まだだれも知らなかったのだ— (p.17-p.18)

少女時代の映像は、現実に存在しているか不明である。それでも、語り手の頭の中には存在している。それを、エクリチュールによって呼び起こそうとしている。「自分の記憶の奥底には確かに存在しているイマージュを、書くという行為（エクリチュール）によって喚起すること」[4]が『愛人』という試みなのである。

「河の横断」がもたらした重大な結果とは、何だろう。少女は、メコン河を横断する船の上で、中国人の青年に声をかけられる。そしてその時点から始まる二人の関係が、少女の肉体に、精神に影響を及ぼす。あるいは、書くという行為につながる意識の種を、芽生えさせたのだろうか。「やりたいことは、あれなの、書きたいの。」(p.35) と、少女は母に告げる。少女には、エクリチュールの必然性が見え始めていたのだった。それに対し、母はどこまでも冷ややかで、子供の戯言と一蹴する。後に、少女は母との関係から離脱して、書くことを選ぶ。少女とエクリチュールは、母と結びつく。母を外側から見つめることで、語りの中に取り込み、「母は流れゆくエクリチュール」(p.47) へと変貌する。

---

[4] 湯原かの子「マルグリット・デュラス『愛人』記憶・イマージュ・エクリチュール」（上智大学仏語・仏文学論集、2015 年）

処女と娼婦

物語には少女の初めての性体験が明確に描かれる。十五歳半の少女は、処女である。十五歳半、中国人の愛人と出会う前の少女には、処女性と娼婦性が併存している。

少女は、「十五歳で悦楽を知っているような顔」(p.16) を持っていた。経験が伴う前から、少女の顔には性行為による悦楽の色が見えた。少女には、「あれのための場所」(p.16)、つまり、性行為や性の衝動をもたらす感情がすでにあった。「欲望のための場所」(p.16) との言い換えは、より直接的で、「あれ」が性行為や性的欲求を暗示していることを裏付ける。

少女の容姿は時折語られるが、何よりも特徴的なのは、異質な帽子であろう。

> あの日の娘の服装で、異様さ、途方もなさをなしているのは靴ではない。あの日のありようはというと、娘は縁の平らな男物の帽子、幅ひろの黒いリボンのついた紫檀色のソフトをかぶっている。(p.21)

少女は金ラメの入ったハイヒールを履いていた。夜会に行くような、少女にとって初めてのハイヒールを履いて、学校にも通っていた。これまで履いていたような、底の平らなズックが、ハイヒールへと変わるのは、少女が子ども時代、ジャングルを駆け回って遊んでいた幼い時代に決別したことを表す。ハイヒールはバーゲンセールで購入したもので、植民地の白人一家でありながら、貧しさと切り離せない少女の生活と、限られた選択肢の中から、奇抜さを見つけ出す少女の才覚が読み取れる。

一方で、少女の「異様さ」や「途方もなさ」を形成しているのはこの金ラメのハイヒールではない、少なくとも、主因は靴ではないという。男物のソフト帽が、少女を変身させる装置なのである。男物の帽子をかぶる少女、女性は植民地にはいなかった。少女はいたずらに男物の帽子をかぶって、母、「上の兄」にしか愛情を注がない母、「上の兄」ではなく少女に宿った才能を認めたがらない母、に見せると、彼女は微笑を浮かべる。ヒステリックで不機嫌な母が、少女を見て笑うのだ。「似合わなくはないよ、まるで別人みたい。」(p.39) と。そう、まさに別人なのだ。少女はこの帽子によって生まれ変わる。少女が少女であると裏付けられた特徴、痩せた身体、ほっそりした手足、平らな胸、それらの特徴が、帽子をかぶった途端、違ったものに見えてくる。「少女時代に独特のあの欠点」(p.21) が打ち消され、ありのままの、生まれたままの姿から、手を加えられた姿へとたどり着き、少女は自分が「女」になったと悟る。

> 突然、自分がちがう女に見える、まるでちがう女が外の世界でひとから見られているようだ、あらゆる男たちの意のままになる姿、あらゆる男たちの眼差の意のままになる姿、四通八達の都市や道路網のなかに、欲望の流

通過程のなかに投げこまれたような姿、そんな姿を見せている。

少女は、欲望に晒される存在になる。眼差しを浴びる。少女は、自分を外から見ている。そこにいるのは女だ。視線の行き着く先にいる女を、少女も眺めているのだろうか。少女は自己を疎外する。意思などそこにはないようだ。少女は自分を内側から見ることができない。自分自身の主体になることができない。常に自分を外側から見つめている。少女に欲望を向ける他の者たちと同じように、見つめている。

少女を女にする帽子、大人にする帽子を、母は気に入った。母は期待しているのである。娘が貧困に喘ぐ一家にお金をもたらすことを、母自身が気づかずに願っているのだ。少女が「幼い娼婦」(p.40) になることを黙認し、娘とお金をすり替えることで、娘を愛しているかのような外観を纏う。

少女はすでに、化粧をしている。無垢な唇を覆い隠すルージュと、幼いころから太陽の光を浴びたためにできた雀斑を消すトカロン・クリーム[5]は、少女の独特な容貌を創出する。幼い身体に、それを覆い隠す品々、変身の装置。まだ年若い少女であることに、疑う余地はないにもかかわらず、欲望を集める娼婦のような女。

「男のひとからじっと見られるのに慣れている」(p.29) 少女に、彼女を眼差した男たちは、「あれのための場所」を見出したのだろうか。視線を注がれる少女は、受動的である。見られる立場に置かれた少女は弱者の側に位置する。

> 自分がこんなふうに人に見られたいと思う—わたしはそのとおりに見えている、美しいとも見えている、美しいということがみんなののぞむことならば、美しい、(中略) わたしについて、みんながこんなふうであって欲しいと思う何にでも、わたしはなることができる。そして、自分がそうだと思うことができる。わたしは魅力的でもあるんだと思うこと。自分のことを魅力的なんだと思ったとたんに、わたしを見る男のひとにとって本当のことになる、その男のひとはわたしが相手の好みに応じて欲しいと願っている、私はそれもまた知っている。(p.30)

美しさの原因は、少女の中にあるもの、荒々しさやあらゆる欠如、好奇心、才気による

---

[5] 例えば、安部公房『他人の顔』(新潮文庫、1968 年) p.21-22 には、主人公である中年の男が、子供の頃に、姉の髢を卑猥で不道徳なものと感じて燃やしてしまう場面がある。女性が日本髪を結う際などに用いられる髢は、純粋な自己の身体に添付されるものであり、少女の帽子や化粧のように、女へと変身する道具であるために、性的欲望を連想してしまう。だからこそ、少年時代の主人公は、姉の髢にただならぬものを覚え、それを燃やしたことを叱る母親に、ただ赤面するしかできなかったのである。

ものだろう。「他に見られる自分が自分を完全な存在に」[6]するために、少女は視線の対象となることで自己を発見し、魅力的になることができるのだ。

ところが、同時に少女は、相手の視線を奪っている。少女はただ単に美しいのではない。可憐なのではない。「美しさは何も生みださない。美しさはこちらから相手を見つめはしない。美しさは見られるだけ」[7]であるが、少女は見つめ返すのだ。か弱き美しさは、相手を見つめることはない。少女は「見られるもの」ではなく、「見せるもの」である。娼婦のような「見せる」身体、性的身体を持っていても、少女は一向に平気である。なぜなら、少女は自分を持っていないから、自己の身体そのものが少女にとって関係のないものだから[8]。ここでも少女は、自分を外側から眺めている。当事者としてではなく、他人のように離れて自分を見ているのである。

そして、少女は知っているのだ。流れ込んだ眼差しに、視線で同意する術を知っているのだ。

> わざわざ欲情を抽きだす必要はなかった。ある女のなかに欲情が棲まわっていれば、男の欲情をそそる、あるいはそもそも欲情など存在しない、そのどちらかだった。女のなげかける最初の眼差、それだけで、すでに欲情がある、あるいは欲情はかつて存在したことがない、そのどちらかだった。欲情とは性的関係への直接的な相互の了解、あるいは何ものでもない、そのどちらかだった。(p.33)

悦楽を知っているような少女に欠けているのは、実地の経験である。少女は、その欠缺を埋めるためだけのように、悦楽を味わうためだけのように、欲望を満たすためだけのように、視線で同意する。

しかし、ここで見つめ返しているのは誰なのだろうか。少女がその主体になりうるだろうか。少女はまるで、面白がるかのように、この同意を観察しているようである。この節に登場するのは、「ある女」であり、少女が自らを含む、娼婦的な、悦楽を求める種の女について語っていると考えられるが、少女は自分のみに特定することをせずに、少女をも多数の中の一員として捉え、「ある女」と表現することで、自分自身の存在、少女という個を葬り去ってしまう。

ところで、少女は娼婦なのだろうか。娼婦と客を結びつけるのは、愛情ではなく金銭

---

[6] 上田章子「マルグリット・デュラス『愛人（ラマン）』破壊された自画像」（四天王大学紀要、2018年）

[7] マルグリット・デュラス『北の愛人』（清水徹訳、河出文庫、1996年）p.89

[8] 永野潤「違和としての身体―岡崎京子とサルトル―」金井淑子・細谷実編『身体のエシックス/ポリティクス　倫理学とフェミニズムの交叉』（ナカニシヤ出版、2002年）p.108-p.109

である。中国人の愛人は少女に金銭的な援助をする。少女だけでなく、彼女の家族が、中国人の援助を受けており、「ラ・スルス」で食事をする場面では、家族が普段目にすることもないような金額の食事をする一方で、家族は中国人である愛人を蔑み、目を合わせようともしない。少女は最終的にフランスへと渡る決心をするが、その費用も愛人から受け取った金銭で賄っている。二人の間に金銭が介在しているのは間違いないが、それだけなのだろうか。少女が中国人を相手に、初めての性行為を経験しようとすると、少女は娼婦のような態度をとる。

> あなたがあたしを愛していないほうがいいと思うわ。たとえあたしを愛していても、いつもいろんな女たちを相手にやっているようにしてほしいの。
> (p.60)

中国人から届く愛情を拒む少女の言動は、無慈悲である。少女を愛し始めていた、魅了されていた愛人への真っ向からの拒絶に、彼は苦しむ。

そこには、彼自身の矛盾も存在する。出会ったときから、白人と中国人の二人の関係には、未来が決してないと理解していた。二人の関係を成立させるには、金銭が必要とわかっていた。それにもかかわらず、彼は愛情を求めるのだ。少女は否定する。同意することはない。そこに愛情は、あってはならないのだ。少女は、中国人の欲望に応える。その態度は、「まるでどんな男にもついていった」(p.61) と思わせるもので、中国人を不安にさせ、諦めさせ、より一層欲望させる。

二人はショロンの連れこみ部屋で逢瀬を重ねる。幾度とセックスをする。少女はフランスへの船に乗ると、突然自信がなくなる。

> (前略) それから彼女は泣いた、あのショロンの男のことを想ったからだ、そして彼女は突然、自分があの男を愛していなかったということに確信をもてなくなった、—愛していたのだが彼女には見えなかった愛、水が砂に吸いこまれて消えてしまうように、そのあいが物語のなかに吸いこまれて消えていたからだ、そしていまようやく、彼女はその愛を見出したのだった、はるばると海を横切るように音楽の投げかけられたこの瞬間に。
> (p.180-p.181)

少女は男を愛していたのかもしれない。弱い男を、男らしさの欠片もない男を愛していたのだ。それは見えていなかっただけであり、少女が見ようとしていなかっただけの愛なのだ。

中国人の男は当初から、少女を愛していると口にした。少女は、十五歳半の白人の少女が、中国人の男と関係を持つという、禁忌を犯すことで、母から離脱するために、愛

から目を背けていた。愛していては、抜けられない家族と貧しさ。娼婦になることでしか、少女は抜け出せなかった。

少女は何度も愛人と共に涙を流していた。当然そうなるように行動することで、冷静さを装っていたが、その場所から距離を置いた途端に、初めて感情に触れる。その感情を拒否していただけであって、少女にはもとより愛が存在していたのではないだろうか。

母は、少女の娼婦としての姿を暗に認め、少女が一家にお金をもたらす手段を覚えることに期待しながらも、少女の処女としての姿を強調する。

> 男たちがみんな、と母親は言う、あの子のまわりをまわるんですよ、白人駐留区の男たちが、結婚している男も未婚の男もみんな、あれのまわりをまわるんですよ、あのちびがお目あてなんですね、あいつをね、まだそんなに女になってもいないのに、ごらんなさいよ、まだほんの子供ですよ。疵ものって、みんなが言いますって？わたしはこう言ってやるんですよ、純粋無垢がいったいどうやったらわが身を汚せるっていうんだね？（p.146）

「純粋無垢」はまだ汚されていない処女である。母は、少女が男の視線を集めることを認めながらも、少女がまだ子供だと、自分の手の中にいる子供だと信じている。母にとって、少女が処女であることは、少女がまだ母との関係から離れていないことを意味する。

しかし、「悦楽を知らなかった」（p.63）母との決定的な差がすでに生じており、悦楽に溺れる少女と母の間にはすでに深い溝ができてしまった。悦楽を知ることで、少女は母から離れてしまう。それが少女の望み、やらなければならないこと、「こんなに愛しているのに、自分よりも上の兄を可愛がるようになる母から」[9]の離脱。

> （前略）このきずものにされた子供の災厄を嘆いて泣く。わたしは声を合わせて泣く。私は嘘をつく。生命にかけて誓うのだ、何もなかったわよ、何も、キスひとつしてないわ。どうかしてるわよ、とわたしは言う、シナ人よ、あたしがシナ人とあれをするって思ってるの、あんなに醜くて、あんなにひよひよした男よ。（p.96）

少女と中国人の愛人関係を追及しながら泣きわめく母は、少女を娼婦だとなじる。娘を子供と思い込んでいた母の怒りは、暴力へと移行する。止めない上の兄、少女がもっと殴られればよいと楽しんでいる上の兄、上の兄への恐怖が、妹が殴られる恐怖に勝る

---

[9] アラン・ヴィルコンドレ『デュラス［愛の生涯］』（田中倫郎訳、河出書房新社、1998年）p.22

下の兄、恐怖から逃げ出そうと、家から逃げ出す下の兄、そこに少女の嘘という応酬、処女性を担保する正直との対局にある嘘。

処女喪失

『愛人』の物語は、「河横断していたときの物語」である。河の横断はもう一つ、処女喪失を示す。渡し船の手すりに肘をついて河を眺める少女、雄大な河、太古の昔から流れ続ける河、美しい河、少女が二度と見ることはないとするこのような美しい河。色彩の乏しいこの国。少女が一度この地を離れたら、もう二度とこの地に戻ってくることがないと、教えてくれる。

> —大海原へと下ってゆくメコン河とその支流たち、大海原という空洞へと、下り下ってやがて消えてゆくこの水の領域。見はるかす一面の単調さのなかの、これらの河、その流れは速い、まるで大地が傾いているかのように注ぎこむ。(p.19)

水の流れが、少女のたどる人生を映す。何かの力が働いているかのように、流れ込むように動かされる少女は、メコン河の走るインドシナから、見も知らぬ大海原、フランスへと渡る。

少女が初めて中国人と出会うのは、渡し船の上である。白人の少女が乗る現地人用のバスとは対照的な大きな高級車、黒いモリス・レオン＝ボレはどこか陰鬱だ。リムジンに乗った上品な男は、少女をじっと見つめる。金持ちの男、運転手付きの大きな自動車に乗っている男、この男は二重に、少女の脱出を約束してくれる[10]。

男はリムジンから降りて、少女にゆっくり近寄ってくる。男の中にあるのは、恐怖だ。白人の少女への人種による恐れ、少女の神々しいほどの美しさに対する恐れ、少女は男の恐怖を読み取る。少女は、「男をまじまじと見」(p.54) つめ、男を査定する。何人かと尋ねられ、中国人だと答える男、恐る恐る、低姿勢に徹する男、彼が身につける上質な絹紬のスーツは、この場合に役に立たない。投げかけられた欲望を、少女は承諾する。

男の眼差し、見つめ返す少女の眼差し、性的関係を承認するには、これで十分なのだ。自動車で送るという男の申し出を、少女は受ける。少女は最初の瞬間から理解している。理解したうえで、中国人の男を愛人に選び、確信犯的に身を落とす[11]。「絶対的映像」はこの出会い、少女と男の出会い、メコン河の上の出来事から始まっている。

---

[10] 西谷修『離脱と移動—バタイユ・ブランショ・デュラス』(せりか書房、1997年) p.154

[11] 中村和恵「Les Indes と『愛』について」『ユリイカ7月号第31巻』(青土社、1999年) p.65

黒塗りの自動車に乗った際に、わずかによぎる「悲傷感」(p.54)、それを敏感に察するようにメコン河に注ぐ光が陰る。少女時代との決別、欲望の発露の認容、予感される、いや、決定づけられた来るべき出来事に心を痛める。男との出会いから、少女の生活は一変するだろう。少女を囲んでいた貧しさ、現地人用のバスには、もう乗ることはない。これまで少女を囲んでいたものとは、もうお別れだ。

> 最初の瞬間から、娘はたぶんこんなふうだと知っている、つまり男が自分の言いなりになる、と。したがって、この男以外の男たちも、かりにそういう場合になれば、自分の言いなりになるかもしれない、と。彼女はまた、ほかの何かも知っている、自分がもはや、自分自身に対するいくつかの義務から逃れることができなくなっているという時期が、おそらく訪れているのだということを。(p.57)

少女は自分に宿る性的魅力の萌芽を予期し、それに手を貸すべく男物の帽子と金ラメのサンダルによって武装する。少女が男に見つめられ、同意すること、これは、少女が自分の道を切り拓くことであり、家族から永久に離れることである。「あれ」のために用意された彼女の場所は、課せられた義務を履行するためにあり、それを権利として享受するまでになるだろう。少女はすぐに、河の上で出会った中国人の男と「あれ」を行い、実地に基づく悦楽を知るのだ。

自動車はショロン地区へと走る。男が部屋に誘うと、少女は来ることに同意した。当然来ることになっていた部屋に、自分のいるべき場所に、少女はいるだけだ。

> 彼女はあまり明確な感情をもたない、憎悪もなく、嫌悪もない、とすればそこにあるのは、おそらくすでに欲情だ。彼女はそれについては無知である。(p.58)

少女は自らの感情をもたない。何をするのも、それをしたくてやっているのではない。したいわけでも、したくないわけでもないのだ。少女にあるのは欲情、男の誘いに同意させるのは、欲情である。少女は「あれ」への欲望を持つのか。少女が求めるのは、その先、「あれ」をした先にある解放である。

怯えが少女にとりつく。無知が少女を怯えさせる。少女が選ぼうとしている未知に怯えている。少女を説得させるのは、これは避けられない出来事であるという事実であり、自分に起こらなければならないことに対応しているのだという確信である。

男は震えている。「セックス以外には男らしいところがない」(p.62) この男の行方は、少女にゆだねられている。男は、少女がどのような人間かを知らない。どのようなことをしてみても、男は少女を把握できないだろう。少女を支配する途方もない頽廃を知る

手段を、この男は絶対に持たない。男の圧倒的な無知が露見する。男は少女を捕まえられない。そのことを少女は知っている。少女の優位。河の上で、少女はこの男を気に入っていた。選択権は、彼女にある。どのように事を運ぶか、彼女に託されている。

自分を愛していない方がいいと、少女は男に告げると、彼は涙を流す。この先も、愛情が一方通行であることを突き付けられ、彼は涙する。しかし、抗いがたい欲望。少女が男を導く。受け身の男は、少女になされるがままだ。男のおずおずとした態度は、「まるで娘を眠りから覚めさせたくない」(p.62) ようであり、少女との行為に躊躇がのぞく。その少女との行為にのめりこむ恐怖、少女に飲み込まれる恐怖と欲望。この少女を目覚めさせることは、危険だが、定められている。

男は泣きながら「あれ」をする。この男はよく涙を流す。少女を貫く痛み。奪われた処女、悦楽に奪われる痛み。「あれ」によって、少女は悦楽の中に投げ込まれる。

> 海、かたちのない、単純に比類のない海、
> すでに渡し船の上で、まだそのときになるまえに、あの映像はこの瞬間をわかちもっていたかのようだ。(p.63)

少女が経験する悦楽の海、渡し船の上からこの瞬間が決定づけられていたように、河を渡る船から海へとたどり着く少女。少女につきまとう水のイメージ。

何も知らない母が騙されて買った大洪水の家で、母は狂人となった。突然、憑りつかれたように家全体を水に浸し、石鹸で家中を洗う。狂気の中にある歓喜、めったになく、上機嫌だ。においたつ石鹸の香りは、真っ白で、純潔そのものである。純真な母を絶望に陥れたのは、すべての貯金をつぎ込んだ家を、沈ませる水だった。水が少女に与える恐怖のイメージ、絶望のイメージ。

だが、水は少女にとって魅惑を同時に感じさせる[12]。美しい河、少女の脱出を可能にする海、その手段としての悦楽。これらの水のイメージは少女を魅了してやまない。さらには、「そうすべきだったの、義務のような感じだった（後略)」(p.64) と少女は語る。「一種の通過儀礼」[13]としての性体験は、少女時代からの離脱を意味し、河の横断のイメージ、そう、絶対的映像と重なる。

性行為そのものが意味を持つのではなく、その体験による河の横断、あらゆる意味での横断、家族からの脱出、母との関係からの離脱、愛人が中国人である禁忌、これらが、少女が禁止に逆らう原動力となっている。

> 出血するということを、わたしは知らなかった。(p.63)

---

[12] ヴィルコンドレ、前掲注８、p.19

[13] 内田、前掲注３

少女の無知、無知は処女性の表出である。少女は、初めての性行為によって出血することを知らなかった。少女の傷つけられた身体から流れ出す血は、海へと続く。痛みと出血は、典型的な処女喪失の印であり、肉体的に処女であることは、これらによって証明される[14]。処女を保証する身体的特徴を知らなかったゆえに、少女は肉体的には処女でありながらも欲望を集める女としてふるまうことができたのではないだろうか。

少女は、言わば「半処女」の状態[15]だったのだ。精神的にはすっかり大人びているようで、幼い娼婦のように行動し、自分に足りないのは実地の経験だけ、つまり、肉体的には性行為を経験しない処女のままだった。

中国人の男は、初めて出会ったときから、少女の性質に気づいていた[16]。男と寝ることを好む少女の性質に、少女の経験が追いつく前から気づいていた。欲望と欲望が絡み合い、少女は男を捕らえて自分を満たす。男は、少女の上で言いたい放題だ。言わせておけばよいのだ。そうすれば、男は肉体が望むことを勝手にしてくれる。そうした小さな問題たちは、考慮に値しないのだ。

---

[14] アンケ・ベルナウ『処女の文化史』(夏目幸子訳、新潮社、2008 年) p.130-p.131

[15] 三島由紀夫『不道徳教育講座』(角川書店、1967 年) p.34-43 において、「処女は道徳的か？」と「処女・非処女を問題にすべからず」という連続した章があり、処女や処女性について論じられている。人間は肉体と精神を兼ね備えた存在であり、処女についても、肉体的処女と精神的処女に分けることが可能である。執筆当時の風潮として、精神的処女を重んじる傾向があった。それは、肉体的に処女か非処女であるかは問題ではなく、好きな男と自分の自由な意志で関係を持ったのであれば、精神的な処女は保たれるというものだった。そして、肉体的には処女であっても、精神的には様々な経験をして悪賢くなった女性、もしくは、無垢や純真といった処女性と結びつく性質を失っている女性を「半処女」と呼んだのである。

[16] 桐野夏生『グロテスク上』(文藝春秋、2006 年) p.212-222 には、ユリコという美少女の処女喪失が描かれている。ユリコは、誰もが見とれてしまうほど美しく、常に視線を向けられる存在である。彼女は、男たち、特に、年上の男たちが自分に欲望を抱いていることを知っており、十代半ばで処女喪失を経験する。ユリコの処女喪失は簡潔に語られ、痛みが予想を超えて激しく、初めてにしては快楽が伴ったとしている。彼女は、自分には人よりも「淫蕩な血」が流れていると考えており、男を求めなくては生きていけない。ユリコにとって性行為は、自分自身の確認作業であり、必ず行わなくてはならない義務のような性質を持つ。そして、ユリコは、初体験の際に「自分はこのことが好きでたまらなくなるだろうと確信」し、天性の娼婦として生きてゆくことになる。『愛人』の少女のように、処女をわかりやすく証明する出血については語られない。また、初体験の相手である叔父に対しては、愛情を抱いていたというよりも、年上の男を誘惑することを楽しみ、自分の魅力を確認し、生まれながらにして存在していた欲望を満たしているようである。ユリコには、「無知」な部分がほとんどなく、処女性を見出すことはできない。

（前略）すべては奔流となり、欲望の力のなかへと流れ込む。(p.69)

行為を繰り返していたある日、突如少女は悟る。「わたしは年老いた。」(p.75) と。性行為を経験することで、一般的には、「大人になる」という表現を用いる。大人は、大人になるとは考えない。大人になると感じることの子供らしさ。悦楽を知っているような、当初の顔立ちが年老いて、少女の顔には、年齢に見合わない疲れがのぞく。老化した少女の顔は、これからの少女の新しい顔となる。

美しさの誤謬

少女は、美しさとは何かを考える。多くの女性が美しくなるために、服を着、念入りに化粧をし、高価な飾りを身につける。しかし、それは美しさの本質ではない。美しさは別のところにある。少女は、美しさの問題はそれらではないと知っているが、どこにあるのかは知らない。植民地に住む白人の女性たちは、自分の手入れを怠らず、慎み深く、いつか来る日々を期待して、じっと待っている。彼女たちに歓喜の日々は訪れない。彼女たちは、悦楽をないもののようにふるまう。女性たちは、自分たちが苦しんでいることを知らない。少女は、自分自身に背いている女性たちが、間違っていると感じている。多くの女性たちに蔓延る、美しさの法則は誤っていると、少女は知っている。

ただひとりエレーヌ・ラゴネルだけが誤謬の一般法則を免れていた。少女時代のなかにいつまでも居残って。(p.33)

少女とエレーヌ・ラゴネルは共に寮で暮らしている。少女は、エレーヌ・ラゴネルに対して、同性愛のような感情を抱いている。エレーヌ・ラゴネルの美しさに陶酔し、欲情している。エレーヌ・ラゴネルは一糸纏わぬ姿で部屋の中を歩き回り、少女をぐったりさせる。あまりの美しさに、少女は疲れ果てるのだ。エレーヌ・ラゴネルの身体は、少女には淫らに映り、その完璧な身体を欲している。エレーヌ・ラゴネルの身体が美しいのは、それが決して持続しないからだ。未成熟なエレーヌ・ラゴネルの、ほんの一瞬に咲く美しさを、奇跡のようなその一瞬を、少女は味わっているのだ。そして、エレーヌ・ラゴネルは、これほどまで少女を打ちのめす美しさについて、「自分でそれがわかっていない」(p.115) のである。エレーヌ・ラゴネルは、自分が美しいことを知らない。いつまでも知ることはない。また、彼女は少女とは異なり、悦楽を知ることもないだろう。いつまでも、彼女は少女として生き続けられるのだから。エレーヌ・ラゴネルは、まだ無垢で、傷つけられていない滑らかな肌をしている。少女の対岸にエレーヌ・ラゴネルは、永遠に住み続ける。少女はすでに河を渡ってしまった。

エレーヌ・ラゴネルを見ていると、少女の夢想が広がる。エレーヌ・ラゴネルを性的

に捉えた、「悪魔的」[17]な妄想である。

> わたしはエレーヌ・ラゴネルの乳房をかじりたい、わたしが毎晩神の知識を深めに行く中華街の部屋のなかで、あのひとがわたしの乳房をかじるように。彼女の乳房がそうであるような、あんな上質な小麦粉のような乳房を男のひとから貪るようにかじられたらどんなかしら。(p.118)

乳房をかじりたい、少女がいるのは男の側だ。貪るようにかじられたらどのようになるのか、想像する少女は、女の側にいる。少女は、中国人の男とエレーヌ・ラゴネルの両者になることで、至高の悦楽を夢見る。他者と重なり合い、自己を喪失する。自己と他者が一体化しており、少女は、自己を超えたエロスへと到達しようとしている。

> わたしはエレーヌ・ラゴネルが欲しくってぐったりしている。
> わたしは欲望でぐったりしている。
> わたしはエレーヌ・ラゴネルを一緒に連れて行きたい、あそこに、毎晩わたしが目を閉じて、わが身に悦楽をあたえてもらい、声をあげているあそこに。わたしは、わたしの上に乗っかってあれをする男にエレーヌ・ラゴネルをあたえて、こんどは彼女の上であれをさせたい。わたしのいるところでそうさせる、彼女がわたしの欲するままにあれをやるんだ、彼女が身をまかせるのだ、わたしが身をまかせているあそこで。そうすればきっと、エレーヌ・ラゴネルの身体という回り道をへて、彼女の身体を横切って、悦楽があのひとからわたしへとやってくるだろう、そのときこそ決定的に。
> それで死んでしまうくらいたっぷりと。(p.119)

自分自身と他者を置き換えることで、結果的に少女には決定的な快楽が訪れる。我を忘れる、失うほどの悦楽の境地を、エレーヌ・ラゴネルを媒介にすることで見出せる。男を知らないエレーヌ・ラゴネルを自分の愛人に与えるという無情ともとれる妄想は、少女と愛人の間に存在する欲望を大きく超えている。自らが欲望を持ち、他者の欲望を引き出す少女とは対照的に、エレーヌ・ラゴネルは生涯、悦楽の海に投げ込まれることはないだろう。それが、エレーヌ・ラゴネルが常に少女時代を生き続けるということなのだ。

エレーヌ・ラゴネルは化粧をしない。派手な装飾品で身を飾ることもない。そして、

---

[17] 清水徹「『愛人　ラマン』解説」池澤夏樹編「世界文学全集 I-4　太平洋の防波堤/愛人ラマン/悲しみよ　こんにちは」(田中倫郎/清水徹/朝吹登水子訳、河出書房新社、2008 年)

エレーヌ・ラゴネルは何が美しいのかを知らない。自分の美しさを知らない。だからこそ、エレーヌ・ラゴネルと女性たちの間には差異が生じる。美しさの一般法則から外れているエレーヌ・ラゴネル、その法則を知らないために、自身が外れていることをも知らないエレーヌ・ラゴネル、少女には真似できない可憐さを持ち、少女を無意識のうちに魅了する。そして、魅了していることにも気づかない。

二人の女王

少女が過剰なまでの関心を示す女性は、エレーヌ・ラゴネルの他に、もう一人いる。「ヴィンロンの夫人」(p.143) と呼ばれた、アンヌ＝マリー・ストレッテルである。彼女は、行政補佐官の青年と不倫関係にあるが、夫の新しい任地であるヴィンロンに家族で引っ越すために、青年との関係を終わらせようとする。すると、彼女がサヴァナケットからヴィンロンに出発したその日に、青年は自殺をした。

少女と中国人の男の関係は次第に周知されるようになり、不名誉な噂が広がり、学校では少女に話しかけてはならないという命令が伝えられた。少女は孤立している。他の女生徒たちは、少女に話しかけない。距離をとっている。しかし、少女の動きをじっと見ている。「この孤立が、ヴィンロンの夫人をめぐる純粋な思い出」(p.143) を少女によみがえらせる。夫人と少女は似ているのだ。少女は、夫人に対して、憧れを抱いているようであり、自分自身との共通点を見出している。

少女は、白人でありながら、植民地の白人社会から排除された「与太者の一族」(p.141) の一員だった。「中国人の愛人となった零落した白人社会の少女」[18]は、汚された身体を持っている。愛人が、少女に「まだふさがらぬ生まなましい傷口」(p.79) をつくった。悦楽のために、傷ついた女。

> 孤立しているのだ、ふたりとも。ともにひとりきりで、ともに女王だ。
> (p.143)

夫人は女王のようであった。スキャンダルの張本人であり、男に愛される肉体を持つ。周囲からの評判、植民地の「待っている」[19]だけの女たちからの悪評は、女王の称号を確固たるものにする。

姦通という禁忌を犯した夫人に、中国人の愛人との性行為という禁忌を犯した少女は魅せられ、共感する。堕落した女たち、汚辱にまみれた女たち、自らの意志を持たず、誰の欲望でも受けるが、誰のものにもならない女たち。二人は、白人社会から排除されている。性愛による堕落は、彼女たちの特権である。悦楽を知る女たちの、栄光ある孤

---

[18] 中村、前掲注 11

[19] 中村、前掲注 11

立、二人は女王だ。

エロスは死とつながる。愛人たちとの行為でもたらされる悦楽は、「神秘的な死」（p.144）である。夫人と少女は、死にたとえられる、禁忌を踏み越える悦楽を求める性質の持ち主だ。「この死はいかにも強く、その事実は町全体に知れわたる」（p.144）ため、白人社会の道徳の枠内で暮らす人々は、二人の頽廃を敏感に察知し、二人を陥れ、汚辱のレッテルを貼り付けることで、死から逃れようとする、もしくは、死ぬことのできない自分を隠そうとする。

河を渡ったその先に

中国人の愛人と白人の少女の不思議な関係について言及したい。水の表象は、女性ジェンダーと親和性を持つ。少女と水のイメージは、全体を通して語られている。一見すると、少女は弱い立場にあるが、必ずしも常に弱者としてあり続けるわけではない。中国人の愛人は、頻繁に泣いていた。この愛人は、どのように語られているのだろう。

少女と男の関係、それは、白人と中国人である。本来ならば、中国人を含むアジア人は、女性ジェンダー側におり、白人が支配する立場にある。ところが、この二人においては、少女の貧しさと中国人の裕福さから、その関係が一時的に逆転している。中国人は、少女を買い、少女は中国人に買われる。中国人は、少女を見つめ、少女は中国人に見つめられる。一方で、少女は、中国人を選び、中国人は少女に気に入られ、許されている。

それから、何度も中国人の愛人の弱々しさが語られる。泣きながらセックスをするのも、男らしさがないのも、滑らかな皮膚を持つのも、この愛人が中国人として、アジア人としてのみ捉えられているからではないだろうか。

少女は、愛人から離れた後に、彼への愛を疑い始める。息苦しい植民地社会から離れたことで、抑圧していた気持ちが解放されたのだろうか。それとも、男と共にやってくる悦楽を愛し、エロスとしての愛を抱いていたのだろうか。少女は愛人に対して、何らかの愛を意識しているが、彼女はどのように男を愛していたのだろう。

少女が旅立つ日付が決定すると、中国人は力を失ってしまい、少女との行為に耽ることができなくなる。少女は、中国人を支配していた。

> 白い肌の娘は、きっと、長いあいだ、あのひとの欲情の支配者、感動と広大無辺の優しさと暗く恐ろしい肉の深みへの個人的な準拠としてとどまったにちがいない。（p.183）

少女は、中国人からすべてを奪い取ってしまう。セックスしか男らしいところのない中

国人、少女との行為でのみ、勇敢になれる中国人、彼はもう力を奪われている。少女と初めて出会った船の上で、感じた恐怖。すっかり少女に囚われる恐怖。少女と離れた後も、少女の肉体が中国人を支配し続ける。時が流れ、中国人が他の女を相手にするようになっても、欲望は少女に向けられることだろう。

男は、少女の身体をいつも洗っていた。水瓶の水で、丁寧に洗っていた。少女は白人であるが、「インドシナの娘」(p.156)のようであった。激しい暑さで痛めつけられた肌、女や子供たちのためにとっておく雨水によって水浴びをしてきた肌。少女は白人というよりも、インドシナの娘のようであり、中国人も、少女との間に「類縁性」(p.156)を見出している。中国人は、少女とのつながり、類似を維持し、常に感じておくために、少女を水瓶の水で洗う。インドシナの娘たちの光る肌。大切にとっておいた、少女のための雨水。

しかし、少女は、インドシナの娘にはなれない。少女は、白人だから。駐留区のジャングルで育った少女は、陽の当たる場所に足を踏み入れると、すぐに、「みんなに覚えられ見世物に」(p.147)なり、異色の白人として、視線の対象となる。少女は帰る場所を持たない。少女にとって、フランスは見も知らぬ地でしかない。少女はフランスに向けて、「旅立つ」のであり、「帰る」のではない。

また、少女と中国人の愛人の行為の最中には、他の人物が少女の中を通り過ぎていた。少女が初めての性行為を経験するとき、中国人の連れ込み部屋を、「繕ったストッキングをはいた女の幻像」(p.63)が横切っている。これは紛れもなく、少女の母の姿である。あの苦しい暑さのインドシナでも、ストッキングを履き続けていた母、穴の開いたストッキングを、繕ってはまた履いていた窮乏した母、校長というのは、ストッキングを履いていなければならないと信じて疑わなかった母。母はどこまでも無知で、数少ない自分の知識から、離れて考えることができない頑固さを持っている。少女が、愛人との行為によって、母からの離脱を目指し、行為の只中で、母を意識している。

悦楽を知らない母と、処女を喪失し、快楽を知った少女。母は後に、少女が中国人の愛人を持ち、汚辱された身体を持つことに怒り狂うが、母は、何に怒りを抱いているのだろうか。少女が、家族に金銭をもたらしたのは、母の期待に沿っている。母は、自分の女としての魅力を、少女が上回ることに、嫉妬しているのではないか。そのため、少女の愛人関係が露見した際には、少女を殴りつけるが、少女が純潔だと涙を流すのだ。

気の狂った母が、落ち着いている時間に、「(前略)手遅れになってしまってね、失くしてしまったんだよ、自分の快楽を求めようって気持ちを。」(p.149)と、少女に語りかける。母は、穏やかで、上の兄しか愛していない母とは別人のようで、意地悪なところがない。これが、母の本音ではないだろうか。快楽を求める気持ちを持たない母、だからこそ、無知な状態でいられる母。それを踏み越えて、禁止に逆らった処女喪失を自

ら選び、悦楽をつかみ取る少女に、母は嫉妬している。母は、自分で行動するようになる少女を、許せない。

愛人に別れを告げ、フランスへと旅立つ船に乗った少女は、最初の出会いと同じように、船の手すりに肘をついている。時間が巻き戻ったかのようだ。少女には、どこまでも水がつきまとう。少女の運命を決定づける出来事、絶対的映像は、メコン河から始まる。少女は愛人を見つけ、処女を喪失する。少女を襲う痛みは、やがてめくるめく快楽へと移り変わる。少女が流す血。少女は、愛人と血が粘るような経験をする。血が流れゆく先は海、悦楽の海、そして、少女を旅立たせる海である。途中、繰り返し涙が注ぐ。水と少女は一体化しているようだ。

メコン河の横断、それは、少女の処女喪失である。

> 河は音もなく流れている、河は音をまったく立てない、身体のなかを流れる血液のように。(p.36)

参考文献

本稿執筆にあたって、脚注に記載のある文献のほか、以下の文献を参考としており、間接的・直接的に本稿に影響を与えた。

1) 芦川智一「最後の復讐としてのデュラス『愛人』」(日本フランス語フランス文学研究、1997 年)
2) 芦川智一「マルグリット・デュラスと植民地―『愛人』と『フランス植民帝国』のあいだ―」(成城大学フランス語フランス文化研究会 AZUR、2005 年)
3) 芦川智一「デュラス『愛人』の成立に関する一考察―IMEC 資料を中心に―」(成城大学フランス語フランス文化研究会 AZUR、2009 年)
4) 芦川智一「フィクションとしてのデュラス『愛人』の成立―IMEC 草稿群に見る『愛人』成立過程―」(日本フランス語フランス文化研究、2012 年)
5) 内村瑠美子『デュラスを読み直す』(青弓社、2014 年)
6) 岡本澄子「マルグリット・デュラス『愛人』をめぐる二つのイマージュ」(日本フランス語フランス文学研究、2010 年)
7) 清水徹「マルグリット・デュラスの受容―『愛人　ラマン』まで」『マルグリット・デュラス―生誕百年　愛と狂気の作家』(河出書房新社、2014 年) p.2-p.4
8) 鈴村和成『愛について―プルースト、デュラスと』(紀伊國屋書店、2001 年)
9) 蘇芳のり子『マルグリット・デュラス《幻想の詩学》』(せりか書房、2016 年)
10) 平岡篤頼「デュラスとヌーヴォー・ロマン」『ユリイカ 7 月号第 31 巻』(青土社、1999 年) p.67-p.75
11) 服藤早苗・三成美保『権力と身体』(明石書店、2001 年)
12) 村田京子『イメージで読み解くフランス文学―近代小説とジェンダー』(水声社、2019 年)
13) 横山昭正『視線のロマネスク―スタンダール・メリメ・フロベール―』(溪水社、2009 年)
14) 芳川泰久「歩くように　書くことの脱＝領土化について」『ユリイカ 7 月号第 31 巻』(青土社、1999 年) p.145-p.157
15) 吉田喜重「モラルと反モラルのはざまで」『マルグリット・デュラス―生誕百年 愛と狂気の作家』(河出書房新社、2014 年) p.5-p.18
16) 山岡捷利「デュラスノート―〈愛人〉をめぐって」(言語文化論叢、1999 年)
17) マルグリット・デュラス『太平洋の防波堤』(田中倫郎訳、河出書房新社、1973 年)
18) マルグリット・デュラス/ミシェル・ポルト『マルグリット・デュラスの世界』(舛田かおり訳、青土社、1985 年)

19)　マルグリット・デュラス/レオポルディーナ・パッロッタ・デッラ・トッレ/ルネ・ド・セカッティ『私はなぜ書くのか』(北代美和子訳、河出書房新社、2014年)